

うつつに響く

作 永山智行

登場人物

亮

耕太郎

綾

男

沙織

耕太郎 うん、まあ、だから要するに、腹が減るだろ。まあ、朝から、いや、昨日から何も食べてないで、腹が減るだろ？そうすつと、何か食べたい、もう何でもいい、何でもいから食べたい。で、目の前に、こうなんか黒ずんだ得体の知れない食いもんがある、で、見た目はあれだけど、なんか甘い匂いがする、でも、もう腹が減ってるから、ちよつと一口かじつてみる、そんなに美味しいわけじゃないけど、まあ、食えないことはない、で、お前は結果それを食って、空腹をしのぐ、ま、要するにそれが、人間の歴史ってわけだよ。

何が「要するに」なのかはわからないが、耕太郎の考えはひどくシンプルだった。人間の歴史をたった三十秒で総括してみたのだ。けれど、どうか、だからというか、亮（あきら）にとっては、「それが真実なのかもしれない」と思わせる、妙な説得力もあった。恋の話をしていたのだった。

耕太郎 まあ要するに、俺も空腹だったわけよ、カミさんと結婚した時は。一週間ぐらい何も食べてない獣だったわけさ。そうじゃなきゃ、あんな、黒ずんだ女……

亮 でも、まあ、甘い匂いはしたわけだろ？

耕太郎 まあ、な……

亮 そして意外にも美味しかった。

耕太郎 いや、それはどうだろう？

亮 じゃなきゃ、お前、五人も子どもはできないだろう。

耕太郎 そこにはまた、ほら、空腹とは別の問題がある。

亮 おんなじだよ。「要するに」、その味がお前の舌にはいちばんなじんだってことだろ。こう、着心地のいいシャツみたいにさ。

耕太郎 そうかな……

亮 たしかに道子さん、まあ、ちよつと色は黒いかもしれないけど、あの歳

で——、四十七だっけ？

耕太郎 あ、うん。

亮 あの歳で、あの締まった体はちよつと、なかなか——

耕太郎 じゃあ、試してみるか？

亮 え？

耕太郎 ふふ、本気にするな。冗談だよ。

亮 ……

耕太郎 でも、ま、お前が相手なら、あいつのわずかに残った最後のみずみずしさも、こう、まだあふれてくるかもしれないな。

亮 やめるよ、もう。

耕太郎 いいか、まず、背中からこう、ぐつと、力強く抱くんだ。顔も見ずにな。そしてそのまま、あいつの左の乳房を愛撫する。ゆつくりと、丁寧にな。それがあいつのいちばん好きなやり方だ。

亮 もういいって。

耕太郎 ま、お口に合うかわかりませんが。ふふ。

齢五十を過ぎてこんな話をするとは思ってもいなかった。亮が少年時代に見た五十歳の大人たちは、ただの頑固なつまらない老人だったような気がする。百年の半分を生きると、人間という生き物は、そういう枯れた姿に変わっていくのだと思っていた。

豊かに実った稲穂が風に揺れている。秋晴れの空はどこまでも高く、今日は絶好の稲刈り日和だ。けれど、この小さな集落の田んぼで、稲刈りをしてる姿は、亮と耕太郎のほかにはどこにもなかった。

機械を止め、田んぼの畔に腰を下ろし、お茶を飲みながら二人の初老の男は恋の話が続けた。

耕太郎 だから綾ちゃんだよ。

亮 何が？

耕太郎 うちのカミさんなんかどうでもいい。ま、欲しけりややるけどな。それよりお前は綾ちゃんをどうにかすべきだろ。

亮 どうにかって？

耕太郎 抱け。

亮 馬鹿言え。

耕太郎 だってそれが綾ちゃんの望みだろ。

亮 なんかわかる？

耕太郎 そうじゃなきゃ、こんなおっさんに毎日弁当なんかつくってこないだろ。

綾は、どういう事情でかはわからないが、年老いた祖母と暮らすため、二年前この集落にやってきた。そして近くの保育園で働きながら、毎日、祖母の世話と、それから亮の弁当づくりをしている。

亮 たぶん老人介護のつもりなんじゃないかな、あの弁当も。

耕太郎 それがそうなのか、そうじゃないのかぐらいわかるだろ、お前も。

ガキじゃあるまいし。

亮 でも、きつと綾ちゃんから見たら、俺たちなんかじじいだぜ。

耕太郎 じじいに恋しちゃだめか。

亮 いやそうじゃないけど……

耕太郎 いいから認める。

亮 でもそれは……不幸だろ？

耕太郎 誰が？

亮 綾ちゃんが。だって俺の娘って言ったっていい歳なんだから。

耕太郎 でもお前は、確かに歳はあれだけど、まっさらの独身なんだから。

亮 まあ……

耕太郎 ほら、据え膳食わぬは、なんとかって言うぞ。

亮 ……。問題がひとつある。

耕太郎 何だ？ 勃たないのか？

亮 はは。直球だな。

耕太郎 俺はいつでも直球勝負だからな。

長年、子どもたちの野球の指導をしている耕太郎らしい返事だった。

亮 いや、そうじゃない。

耕太郎 じゃあなんだ？

亮 俺、そもそも、空腹なのかな……

永戸亮が見ず知らずのこの集落にやってきたのは十年前のことである。広がる田んぼと畑、森、墓地、一軒の商店、あとは公民館ぐらいいしかないこの集落は、もう三十年ぐらい前からだんだんと人が少なくなってきた。子どもたちの世代は、仕事を求め、ここを離れ、残された者たちは一日一日老いていく。そしてあんなに美しかった田んぼや畑の手入れもままならなくなっていく。亮は、興味本位で田んぼの畔の草刈りを手伝ったのがきっかけで、今では数軒の田畑の手入れをまかされていた。もちろんそれでもらえる謝礼は決して多くはないのだが、米や、野菜は、お金を使うことなく手に入る、そんな暮らしに満足していた。

何よりそんな暮らしが、あの記憶を遠ざけてくれるような気がしたのだ。あの恋の記憶を。

二

亮 綾ちゃん。

綾 え？

亮 もう一回言って。えっとー

綾 ふふ。だから、リッチー・ブラックモア。

亮 ああ。

綾 知ってます？ リッチー・ブラックモア。

亮 いやあ……

綾 でもすごい名前ですよ、リッチー・ブラックモアって。リッチーで、ブラックで、モアですもんね。

亮 え、で、何してる人だっけ？

綾 あ、ギターリストです。なんか、ロックの。

亮 あ、それで、その人がギター弾いてる夢見たんだ。

綾 ギター弾きながら追いかけてくる夢です。

亮 え、綾ちゃん、好きなの、その人？

綾 いや、全然。ちゃんと聴いたこともないし。

亮 え、じゃあなんで？

綾 お兄ちゃんが好きだったんです。なんかそういうハードなやつ。

亮 へえ。

綾 だからなんか名前だけは知ってて。

綾は、仕事帰りにいつも亮の家を寄って、弁当箱を預かって帰っていく。今日も、亮が稲刈りを終え、軽くシャワーを浴び、缶ビールの蓋を開けた夕イミングでここにやってきた。そうして昨夜見た夢の話の話を亮にしている。

綾 で、そのリッチーが、すごいしわがれ声で「おうおう」って歌いながら、ギターをギューインギューインって言わせて追いかけてくるんです。怖いですよ？わたし、なんか気づいたら、こう耳ふさいでガバツて起きましたもん。ふふ。

亮 ……ね、綾ちゃん。

綾 え？

亮 ひとつ訊きたいことがあるんだけど、

綾 え、何ですか？

亮 その、リッチーの――

綾 あ、そっち？

亮 え？

綾 あ、いや、なんか別の話かなと思って…。あ、いいです、すみません。リッチーでしょ？何ですか？

亮 その、リッチーの声とか、ギターの音とか、そういうのって、綾ちゃんには聞こえてるの？その、夢の中で。

綾 はい。結構、こう生々しく。え、亮さんって聞こえないんですか？夢。

亮 うん……。なんか、たぶん、音は、ない。

綾 へえ、そうなんだ……

亮 だから、こう、声も、聞こえない。

綾 ふうん。なんか、みんな聞こえるのかと思ってました、夢。音。

亮 わかんない。俺だけがそうなのかもしれないけど、でも、姿ははっきり見えても、声だけ、やっぱり聞こえないんだ。

綾 ……夢は、見るんですよね？

亮 まあ、たまにね。

綾 どんな？

亮 ー……

綾 昔のこととか？

亮 そうね……

綾 ここに来る前のこととか。

亮 ー、それだけじゃないけど……

綾 わたし、出たことがあります？その中に。その夢の中に、わたし出てきたことありますか？

亮 ……うん。

嘘をついた。いや、嘘なのかどうかも亮にはわからなかった。もしかしたら、綾が出てくる夢を見たことがあったのかもしれないが、それはたとえば、高校二年の時のクラスメイト全員の名前と顔を思い出せないように、あやふやなものだった。確かにあったのに、今となつては存在したかどうかさえ思いつけないもの。

綾は上気したような面持ちで、丁寧に包んだ弁当箱を持って帰っていった。亮は、いつにも増して自分の存在を憎らしく感じた。

三

男 消える、ということについて真剣に検討すべきじゃないのかな。
亮 わかっている。

男 それはどっちの可能性についてだ？

亮 どっちのつて？

男 この集落から消えるのか、それとも、この世界そのものから消えるのか。
亮 そのどっちもだ。どっちの可能性も考えてる。

夢の中での人々の声は聞こえないのに、亮のその胸に住まう、もうひとり
の男の声は、亮の耳の奥からはつきりと聞こえるのだった。

亮 は二本目の缶ビールを開け、その男を押し流してしまおうと、一気にビールを胃袋へと流し込んだ。けれど、男は相変わらずそこにいたままだった。

男 子のいない、ましてこれから子ができるとも考えにくいお前がこの世界から消えたところで、粛々と進行する葬儀と、しばし嘆く幾人かがいるだけで、その後にはいつもと変わらない日常と景色が続いていくだけだ。

亮 言うな。俺の方がわかってる。

男 じゃあ何がお前をここに留まらせる？

亮 ……

男 声か。

亮 ……そうかもしれない。

男 あいつの声か。お前の耳に届かないあいつの声か。

亮 けれど、それは、いま、確かに、世界のどこかで鳴り響いている。

男 だが、ここまでは決して届かない。

亮 ああ。だって、そういうところまで俺は逃がれてきたのだから。

男 それでもお前はあの声にもう一度会いたがってる。

亮 ……そうかもしれない…

堂々めぐりだ。この後の、亮自身の対話はいつも堂々めぐりを繰り返す。十年間。ずっとそれを繰り返してきた。

十年前、亮は四十一だった。もうさらに十年前、亮は三十一だった。そうして三十一から四十一の十年間、亮は沙織を、いつもそのそばで深く愛した。ありふれた出会いだった。亮が勤めていた小さな印刷会社に、ある日、求

人情報誌を見てやってきた若い女、それが沙織だった。はじめの頃、二十歳を超えてまだ少女らしさを湛えた沙織の容貌に、亮はまったく興味を持つことができなかった。けれど、一年ほど経った初夏、会社の懇親会の帰りの星の見える夜に、酔った沙織は不意に亮の体にしがみつき、口づけた。長く、深く。そこには少女の気配は微塵もなかった。そしてそれが亮の十年間のはじまりだった。

翌朝、そのことをまるっきり忘れたかのように接する沙織に、亮は戸惑った。けれど、亮が沙織の部屋へ行くことを拒むこともしなかった。その部屋で二人が週に二、三度愛しあうようになった後も、沙織は、自分から亮を誘うことはなかった。亮が誘うことをしなければ、食事に行くことも、体をむさぼりあうこともなかった。二人はいつたい「恋人」と呼べる関係のものなのか、堪えきれず亮が「愛してる」と平凡で、けれどそうとしか言いようのない言葉をぶつけた時も、沙織は「ふふん」と微笑むだけで、すぐに近所の猫の話をはじめた。

それでも、いや、それゆえに、亮は、ますます沙織を愛してしまっていた。「結婚しよう」と、意を決して告げたこともある。けれど、そんな時も沙織は「ふふん」と微笑み、「あたし、いま、好きな人がいるの」と亮を啞然とさせ、その後は、最近見た映画の話をはじめた。

事実、沙織には、その時々、好きな男がいて、あつさり、その男たちを手に入れると、いつの間にか、もう離れているようだった。

どうしてこんな女を好きになったんだろう、何度も亮は自問した。それでも亮は、沙織の肌に触れるたび、沙織を愛することをやめることができなかった。

そうしていつの間にか十年の月日は流れた。「もう、だめだ」。初夏、会社へ向かう電車の中、亮は、何の前触れもなく、不意にそんな思いにとりつかれた。そのまま、会社がある駅のひとつ手前の駅で、電車を降りると、それからもう二度と会社に行くことはなかった。そうしてなんのあてもないまま、荷物をまとめ、下りの電車に乗り込み、知らない土地へ行くことにした。

そして、それから、また十年。もちろん、沙織が自分を探そうとすることなど考えられなかった。亮がいなくなったことを知った日も沙織は「ふふん」

と微笑むだけだったろう。犯人が明かされないまま終わってしまう推理小説のように、亮は、いったい自分が沙織にとつて何だったのか、深い闇に突き落とされたようだった。そして、たどりつく可能性はただひとつ、結局、お前はなんでも存在だったのだ、という厳しい判決だけだった。

四

二本目の缶ビールも空になった。

そのそばで愛していた十年、それよりも、こうして離れたまま、やはり愛することをやめられない年月の方が長くなるうとしていることに、亮は、今日、気がついた。けれど、今度は「もう、だめだ」と言つて逃げる場所はない。いや、ひとつ、あるにはあるが……

亮は立ち上がり、古いレコードプレイヤーに向かった。恐らく一九七〇年代後半につくられたであろう、アンプ内蔵のそのレコードプレイヤーは、スピーカーまで含めると、小さな家具と言つていいほどの大きさがあり、色あせてはいるが褐色の木目調で、かつてここに住んでいた主が、音楽をこよなく愛し、家という空間の要諦として、このプレイヤーを置いたのであるうことを物語っていた。亮は、この家と、レコードプレイヤー、そして名前も知らぬミュージシャンたちの数多くのレコードをすべて、そっくり借り受けていた。

亮はいつものように、ジャケットを見ることもなく棚から一枚のレコードをつかみ出し、そのまま確かめせず、レコードをターンテーブルに乗せる。知らない音楽に出会うことを、亮はまるでゲームのように楽しんでた。

ピアノが流れます。それからようやく、亮はジャケットを見た。「ニーナ・シモン」。ピアノを弾き歌っているのは、そんな名前の黒人女性らしい。誰が書いたのか、ジャケットには手書きで「B面、十九分三十四秒」とメモしてある。「そうか、B面は十九分三十四秒なのか」と、亮は事実を事実として受け取った。そして五十一歳になった自分も、確実にB面の二曲目あたりにいるのだという事実を、なんだか素直に受け取った。

ニーナ・シモンの切ない褐色の声を聴きながら、亮は目を閉じ、うとうと

とした。そして夢を見た。

恐らく二十代のままの沙織の体は亮の上で揺れていた。小ぶりの乳房はほどよくひきしまり、ほんの小さな丸い種のような乳首を、亮はそつと中指で撫でていた。そうすることが、沙織のいちばん好きなことだった。けれどやはり、沙織のよがる声は聞こえなかった。亮は今度はその丸い種を舌で丁寧に触れ、吸い、舐め、それから、激しく沙織の奥まで入っていった。けれど、どこまで奥に行っても、そして何度そこまで行っても、そこから先は行き止まりで、沙織のほんとうの魂のありかまでは届かない。いつまで経っても聞こえない沙織の声が、そう厳しく事実を告げていた。

うっすらと涙を浮かべた目で、亮は目を覚ました。B面はいつのまにか四曲目になっていた。

I've forgotten you just like I should,

Of course I have,

Except to hear your name,

Or someone's laugh that is the same,

But I've forgotten you just like I should.

(*"I get along without you very well"*)

「あなたなしでもうまくやれる」とニーナは歌っていた。

確かにそうだ。そうすべきだ。この十年はそのための時間だったはずなのに、と、亮が思った時、声は聞こえた。

声 ね、カーディガンの色ってどうあるべきだと思う？

亮は立ち上がり、部屋を見まわした。けれどそこには誰もいない。

声 黄色もね、色が濃いのはなんだかシェイクスピアの祝祭劇の道化みたいでしょ。かと言つて薄い色のものも、なんだか存在がぼんやりしてて、わざわざその色を羽織る必要があるのかって……、あ、まったく個人的な意

見ただけだね。

懐かしいその声は、十年経っても変わらず、どうでもいい話を続けている。

亮 沙織……

名を呼んだ。

声 あ、そうそうこの間、久しぶりに動物園に行ったんだけど、ゴリラって意外にかわいいなって思って…、小さいときは全然そう思わなかったんだけどね、

亮は声のありかを探す。それはさっきまでニーナ・シモンがピアノを弾き歌っていた場所だった。あのアンプ内蔵のレコードプレイヤーから沙織の声は聞こえてきたのだ。

亮 沙織……

声 ふふ。

夢のつづき、なのかもしれない、と亮は思った。でもそれでもいい。ずっと聞こえなかった沙織の声が、確かにいま、この耳に響いているのだから。沙織……、沙織……、と、亮は何度も名を呼んだ。声は、ゴリラのかわいさの話と、それから、くしゃみが果たす役割について、愉快的考察を続けた。

亮 沙織……

亮は延々と響き続けるその声に話しかけた。

亮 な、十年なんて、思いがけない速度で過ぎていくんだ。そして気づくと、

もう戻れない場所に立ってる。

声 ふふ。ね、しゃっくりついでどんな意味があると思う？

亮 はじめて人生というやつを生きてみてわかった。耕太郎は、バッターボックスに立って、調子がいい時は、ボールが止まって見えるって言ったけど、やっぱ、ボールは止まってない。何も考えずに投げたボールは、時速百キロを超える速さで、外野スタンドまで飛んでって、もう二度とこのグラブの中に帰ってくることはないんだ。

声 ふふ。

亮 そうしてB面は、十九分三十四秒で終わる。わかるんだ、ここに来て、季節の中で、時間を過ごしていると、一日一日、この体が減んでいくのが。昨日できてたことが、少しづつ、今日にはできなくなる。そんな速度でボールはどこまでも飛んでいく。

声 ふふ。でも、どうにもならないものは、どうにもならないしね。だけど、どうにかなるものは、どうにかなるわけでしょ。だからしゃっくりも、こゝろ、楽観的に諦めるしかないと思うの。ま、水を飲んでみるぐらいはしてみてもいいけどね。

亮 愛してる。

声 ふふ。

亮 愛してきた。

声 ふふ。

亮 でも、やがて、おそらく、数十年のうちに……、滅びる。

声 あのね、こしあんとおぶあんについて人はどのくらいこだわりを持つかということを考えてみたの。たぶんだけど――

声は陽気にしゃべり続ける。それは、古いレコードのように、過去に記録された声にも聞こえる。けれどまた、今、現在の、四十代になった沙織の声にも聞こえる。そして亮は、その声に幾分か涙が交じっていることに、ふと気がついた。もちろん、沙織の体が見えない以上、そのことを確かめる術はない。ただ、その声の、その震えに、わずかな沙織の涙を感じたのだ。

どうして沙織は、こんなにもいいことを俺に向かってしゃべり続け

るのだろう。十年前には考えたこともなかった問いが、亮の中に生まれた。途端に、それは、沙織が亮に向けたメッセージのようにも思えた。

「わたしは、あなたに話しかける、ずっと。わたしは、あなたに。たぶん、どうでもいいことを。ずっと。」

俺はまだ知らない、と亮は思う。沙織の中にある、寂しさのことを。どんな男でも、もちろん亮でも満たすことのできない、ぼっかりとした、虚ろな空間のことを。

亮 沙織、

声 ふふ。

亮 こしあんとおぶあんのこと、もう少し、話して。

声 ……うん。それでね——

亮は、その声を聞きながら、ゆっくりと声のありかに近づき、それから両腕を精一杯に伸ばし、その古いレコードプレイヤーを、抱きしめた。

レコードは回り続けている。けれどもう、ニーナ・シモンの声は聞こえない。ただ沙織のしゃべる声だけがこの部屋に響き、そしてこの部屋を満たしていた。

このまま、この滅びゆく肉体に、そしてこの滅びゆく土地に、俺は住まうのだ、と亮は思う。

今は秋。やがて冬が来て、そうして春……。春が来れば、春が来れば……。けれどそこから先の言葉を、亮は見つけることができなかった。ただ飽きもせず、レコードプレイヤーを抱き続けていた。

B面は、最後の五曲目がもう終わろうとしていた。